

くすの木通信

三高だより第182号

「エンパシー」

人権教育課長 大西裕美

エンパシー(empathy)という言葉を知っていますか。「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」の著者であるブレイディみかこさんの言葉を借りると、「他者の靴を履いてみる」。もちろん、他人の靴をあえて間違えて履くことは困ったことですが、そうではありません。自分が今はいている靴を脱ぎ、自分という軸を持ちつつ人の立場に立ってみる、その人がどのような境遇でどのような思いでいるかを想像してみる、という意味の言葉です。今年の東京開催のオリンピック・パラリンピック大会は、エンパシーを持つきっかけとして、意義深いイベントでした。

開催については賛否両論ありましたが、私はアスリートの活躍に釘付けになり、新聞記事を読みまくりました。白血病を乗り越えて出場を果たした池江璃花子選手の復活の泳ぎは、感動そのものでした。また、パラリンピックの種目の特殊性には驚きました。ボッチャという競技も始めて知りました。両腕がなく、ほぼ足の力だけでバタフライを泳ぐ選手。男女混合の車椅子ラグビー。「きずな」というロープで選手の“目”となるガイドランナーとつながって走るマラソン。自分の障がいや挫折を乗り越えて限界に挑む姿、それを支える人の想いは、コロナ禍であったがゆえにより深く心に響きました。その一方、選手一人ひとりが抱えている問題は衝撃的でした。それは、平和な国とされる日本で生活している私たちの想像を超えたもので、信じがたい事実を突きつけられた感じでした。車に仕掛けられた爆弾が爆発し、3歳で両足と右腕を失ったイラク代表の卓球選手は、義足と義手で試合に臨んでいました。生まれつき髪や肌の色素が薄い遺伝子疾患の「アルビノ」のムンガ選手。「アルビノ」の体の一部を得ると幸福になるという迷信があり、呪術に使うために手足を切断されたり血を抜かれる。また、その見た目ゆえにいじめや差別がついて回る。ムンガ選手の出場目的は、メダルを取るのではなく、「アルビノでも、女性でも、母でもスポーツができることを示して差別をなくす」ことでした。同じ地球上に生まれ同じ時を生きているのに、抱えている問題や日常生活がこんなにも違っている。人と違うということで、不当な偏見や差別にも苦しんでいる。パラリンピックを通して見えてきたことは、あまりに自分が世界のことを何も知らなかったということでした。差別や偏見は見ようとしないと見えない。知ろうとしないと決して気付けない。一人で世界を変えることはできません。しかし、エンパシーを持って、自分の今の思いや行動は変えることができます。オリパラでの理念である「多様性(diversity)と調和(harmony)」を、目に見える形で実現していくために、エンパシーを持ち、自分の思いを行動に移していきましょう。

11月は「差別を無くする強調月間」です。ちょっとしたタイミングで自分を振り返ってみると、今まで気づけなかった自分が見えてくることがあります。自分の言動が、人を押しえつけ、決めつけ、傷つけていませんか。「ありがとう」を口に出して言えていますか。元気な挨拶が、優しい笑顔が、周りの人を幸せにします。今すぐできる第一歩です。

Start where you are. Use what you have. Do what you can.

(あなたの今いるところから始めましょう。
あなたが今持っている物を使いましょう。
あなたができることをやってみましょう。)